

プロローグ

「やあ、少年。そのままでもいい。楽にして聞いてくれ。

首絞めの末の窒息死、生きたままの焼死、腹上死、癌との長い闘病を経た衰弱死、トラックにはねられて失血死、首吊りは窒息よりも神経の圧迫による死亡が多いらしい。愛するものに手をかけられるなんてのもロマンチックか。人の死に方は千差万別だ。理由まで含めると、完璧に同じ死に方なんて、世界に一つだってありやしない。人の死は、なにも生の終わりってだけじゃない、と私は思う。人は等しくみな死に向かって歩いていく。その花道を綺麗に舗装していくのが人生なんじゃないかって。

この世界には、こんなにも多様で美しい死に方が揃っているんだ。嗚呼、何故人は一度しか死ねないのだろうな。選べなくて困るじゃないか。どうだい、君もそうは思わないか」

突如僕の目の前に来た女性が語りだし、奇っ怪な状況

に話を挟むことも出来ず、僕も思わず聞き入ってしまった。こちら側に話を振られるとは思っていなかったため、返答に窮していると、答えたくないという意思に取られたのか、彼女は話を続ける。

「いじめか、鬱か、勉強の悩みか、恋人を亡くしてもしたのか。君をそこに立たせた理由はどうだっていい。言いたくないというのなら私は聞かない。話したくない身の上話なんて、一つや二つあるだろうし、ね。でも、そこから飛び降りるのはおすすめしないよ。だって、飛び降りなんて実によりふれていて面白くないじゃないか。無理に生きろとは言わない。だが、私とともに——最

高の死に方を探さないか」

そう言って、彼女は手をこちらに差し向けた。

ただ自殺を止めに来たわけじゃない。正義感から、飛び降りる寸前の僕に話しかけてきたわけでもない。薄っぺらい理由で生きろという、綺麗な人間でもない。彼女は、笑ってしまうような理屈で、僕が死のうとするのを止めようとしている。彼女は、こんな状況ですら僕に選択を委ね、目の前で僕が死んでもおかしくない話しかけ方をしている。

不器用そんな、僕が今すぐに飛び降りしてしまうのではないかと想像して少し震えている、理解できないような論理で、極めて真面目に死のうとしている彼女の手を、僕は柵越しに握った。

「——なら、あと少しだけ」

万が一にも下を歩いている人を巻き込まないように人通りの少ないビルを選んだのに、彼女に出会ってしまった。それは偶然と呼ぶにはあまりにも作為じみていて、神はいたずら好きなようだった。まだ僕は死ぬには早いと、天使が送り返してくれたのだろうか。それとも、目の前のこの、全身に黒い服を纏った彼女こそが、悪魔なのだろうか。どちらにせよ、この手から伝わってくるぬくもりをくれた彼女のために、あと少しくらいは生きてみたいと思えた。彼女の目の前で僕が死んで、それが彼女の美学に反してしまつてはいけないと感じた。

遙か後方に浮かんでいる満月が、美しく髪を照らす。

美人という言葉は、今日この時のために存在するとさえ思えるくらいに、妖しく艶やかだった。

柵の外側からまだ戻ろうとせずにぼうつと立ち尽くす僕を不思議に思つたのか、彼女は手をゆっくりと離す。

「そんなに月を眺めてどうした。危ないから早くこっちに入ってきたらどうだ」

僕が眺めているのは月ではなく、その手前にいるあなたなんです。と言うことも出来ず、曖昧に頷きながら柵をまたぐ。彼岸に足を一步踏み入れた僕を、此岸にまだ留め置いた彼女は、胸をなでおろしたように息を吐く。

『月が綺麗ですね』というやつかな。夏目漱石はそんなこと言っていないらしいがね」

「そうらしいですね。じゃあ、僕は『死んでもいいわ』

「君にはもう少し生きてもらいたいな。折角なら」

「——はい」

「彼の名前の由来は物騒だが、実にロマンチックな翻訳だ。それで、名前くらいは聞いても大丈夫かな？ 君の名前は？」

「僕は——紫茜あかねです。色の紫に、花の茜であねって読みます」

生まれたときから使われている、変な名前だ。

「へえ、珍しいね」

やっぱりこの人も、こういうびっくりしたような反応

をする。実際、珍しいから間違っていないのだけでも。

「私は、岩永桃寧だ。探偵をしている。よろしく」

「探偵、ですか——」

見た目からはどんな人か想像はできなかったけれど、およそ現代に聞いたことのない職業が飛び出してきた。

「どうだ、驚いただろう。君の名前なんかよりも、よっぽど珍しい」

多分ね。と付け足し、岩永さんはウインクしてみせる。

「でも探偵なんて、小説の中ぐらいでしか」と言いかけたところで心当たりがあり、言い直す。

「いや、最近は浮気調査とかを専門にする探偵業がいるんでしたっけ」

「んーまあ、半分正解ってところだね。私も、そういう現実的な探偵業を行って、お金を貰うこともある。お金がなくちゃ現代を生きていくことは出来ないからね。

シャーロック・ホームズみたいに成ることは、もう時代が許してくれないんだ。

でも、私はれっきとした探偵さ。フーダニットとハウダニット、アribaい崩しに密室トリック、それらを破る

——推理の専門家だ」

今度は堂々と言い切り、大見得を切ってみせる。

でも、僕の疑問はまだ尽きないどころか、むしろ増えていく一方だ。訝しみながら問う。

「——今どき、ミステリみたいに事件が起きるものなんですか」

「起きるさ。私は事件を通して人が死ぬさまを何度も見たことがある。人に死んでほしいと思っているわけではないが、探偵をしていると様々な死に方を見ることが出来るからね。私にとっては天職のようなものさ」

起きると断言した岩永さんの言葉を受け入れられていない僕の表情を見て取ったのか、自慢げに言う。

「だって現に今、君は死ぬ寸前だったじゃないか。私の前では、事件が起きる。これは紛れのない事実だ」

さっきまで死のうとしてビルの縁に立っていた人間からすると、耳が痛い話だ。

「そして、君さえ良ければなんだが——」

コホン、と一つ咳払いをして続ける。

「私の助手になる気はないか。名探偵にはワトソンが必要だろう。三食昼寝付き、帰る家も提供しよう。もちろん

ん辞めなくなったら辞めてもいい。どうかな」

「——はい」

「ふふ、そんな顔をするな。せつかくの顔が台無しじゃないか。——いや、こうも暗いと何も見えないな。周りは誰もいないし、私の口は守秘義務にまみれて堅いんだ。気にするな」

「周り……くどいです……」

こうして、僕は探偵の助手として働くことになった。

僕たちの関係は、一歩間違えていたら探偵と助手ではなく、被害者と目撃者になっていたわけだ。その出会いに感謝して、今日も生きることしよう。いつか来る、幸福な死まで。

いつからか知っていた

「助手、旅行に行くぞ」

「今度はどこに行くんですか」

呆れながら僕が詳細を聞きたです。桃寧さんがこうやって急に何かを言い始めることは珍しいことではない。探偵という職業柄、日本国内ぐらいであればその日中に、現地向かって事件の解決にあたることもある。今回もどこから依頼が飛んできて――。

「ああ、今日は仕事の依頼じゃないよ。普通に旅行。海に行きたいから、うんとまあ、そうだな。適当に東にでも向かうか」

違ったようだ。でも、岩永さんは体質の問題なのか、探偵としての性なのか、事件に巻き込まれる傾向にある。某小学生の探偵みたいに、向かう先々で殺人事件に巻き込まれる、挙句の果てには事務所の下のカフェで事件が起こる、みたいなことはないのだが、一般人が人生で巻き込まれる事件の平均数を考えると、遥かに多い。

日本ではせいぜい千〜二千程度しか一年間で殺人事件は発生しないはずなのだが、それを明らかに逸脱した頻度で事件に遭遇している。まあ、首をつっこみにいったせいで巻き込まれているというのも多いのだが。

「珍しいですね。行き場所も決めないで旅行なんて」

「まあね。海を見たい気分だったから、海に行こうというわけだ。実に理にかなった行動だろう」

ふふん、と鼻を鳴らしながら言う。

「でも、その間に依頼が来たりしたらどうするんですか。この事務所は留守にするわけですよね」

「無視するよ」

「――はあ。どことが理にかなった行動ですか。一応探偵業で食っていないといけないのに、そんなことで良いんですか」

「私は、まったりと暮らせる資金ぐらいあればそれでいいんだよ。あとは死に方を見つけるだけさ、たまたま私に推理の才能があったから探偵をしているだけで、なにも探偵である必要はないんだ。だから、私たちがいなかったことで救えなかった人がいたとしても、それでいい。そういう巡り合わせの運命だったというだけだ。そ

の人が救われるのは、私たちにはなく、別の人だったということだ。勝手にその人が助かるのかもしれないし、最速の忘却探偵が駆けつけるかもしれないし、神が手助けをしてくれるかもしれない。まあ、私たちは手のひらの上だからね、適当に生きたって罰は当たらないさ。すべてを見られてるわけじゃないんだからね」

虎じゃあるまいし。と桃寧さんは付け足して笑う。随分と無責任な探偵だ。人の死を見られるから探偵をやっているというのだから、不謹慎でもある。職業が探偵というだけで関わりたくないのに、こうまで適当だと仕事の依頼もしたくなくなってしまいそうだ。無責任で不謹慎で無愛想な探偵、どうして僕はこの人に救われたのだろう。まあその適当さに救われたのだから、僕も同じ穴の貉なのかもしれない。お互いにスマホを触りつつ、顔も上げずに会話を続ける。

「それで、どこに行きますか。東って言っても、海は広いですよ。ダーツでも投げますか」

「それは名案だね。流石、私の助手だ。——で、ダーツはあるんだろうね」

「ないですよ。逆になんであると思ったんですか。どっ

ちもダーツなんてまともにやったことないでしょ」

「仕方ないね。じゃあ、適当にジオゲッサーで市町村を決めて出たところに行くことにしようか」

「——あのゲーム、もう完全に有料化したんでお金払わないと遊べないですよ」

「むう、そうか。じゃあ、ストリートビューで適当に海岸線拾いでも見てみるか。それなら無料だろう」

「それはそうですね。でもなんでそこまで適当に旅行に行くことにこだわってるんですか。普通におすすめの場所とかを調べるのじゃダメなんですか」

桃寧さんは振り向いて、後ろに置いてあるパソコンの電源を入れながら、答える。

「普通に生きていちゃ、つまらないじゃないか。ありきたりなところに行くのも悪くはないが、悪くないというだけだ。万人受けするのはもちろん良いんだが、誰も行っていないような秘境の奥地でまだ誰も見たことのない初めての景色を拝むほうが良いと思わないか」

そう語る桃寧さんの目は、無邪気な子どものように輝いて見えた。

「それに、君とならどこに行ったって楽しめそうだから

らね」

全く、この人はずるい。たまにこうして、不意打ちでデレてくるから厄介だ。

「僕もそうですよ」

だから今日は、僕もやり返してみる。純粋な好意を込めた返答だ。

「——へえ、そうかい。お、起動したから海に降り立ってみるとするかな」

露骨に話をそらされた。でも、僕は見逃さなかった。

いつもより長い沈黙と、少し赤く染まった耳の色を。

桃寧さんが適当にストビューの右下にいる人を掴み、

海岸線沿いに落とす。すると、最初に出てきたのは海に浮かぶ鳥居だった。

「敵島神社みたいだね。規模感はそのままでけど、面白そうだ」

道沿いを軽く眺めるとパソコンをすぐに閉じ、桃寧さんは壁にかけてある帽子を手取る。

「行くよ、助手。近場だし夜には帰ってくるでしょう。

三十秒で仕度しな」

「そんなこと言われなくても、もう準備は済んでいますよ。

というか、別に泊まるわけでもないから荷物はそんなに持たなくて良いんじゃないですか」

「まあ、そうだね。でも、何が起るか分からないから現金だけは少し多めに持つておくことにしておこうか。

では、行こうか。君の見たことのない景色を見せてあげよう」

バスに乗り、電車を乗り継ぎ、再度バスに乗り、僕はちはたどり着いた。謎の場所に。

「どこですか、ここ——」

「いや、迷ったね。ここは本当にどこなんだろう。木がいっぱいと遠くに海があるってことしか分からないや」

「なんでこんな何も無いところで、次止まりますのボタン押しちゃったんですか」

「天啓が降りたんだから、仕方ないだろう。次のバス停で降りろって」

「にしてももうちよつとぐらいマシなところあるでしょうに。ひとまずマップでも見ますか——」

と言って僕がスマホを取り出そうとしたものの、それ

に待ったの声がかかる。

「いや、このままでいい。マップは必要ないよ」

「でも、迷子なんですよね」

「ああ、我々は迷っている。ここがどこかも分からない。

バスを乗り間違えたつばいから山奥に入っていく前に慌てて降りたのはいいものの、分かっているのは、このバス停の名前くらいだ。だが、それで良い。この旅はろくに目的も目的地もないんだから、気まぐれに行こうじゃないか。その方が、きっと楽しいだろう」

「——バスを乗り間違えたのを認めましたね。でも、気まぐれの方が楽しいってのはそれもそうですね。じゃあ、右と左、どっちに進みますか」

僕の提示した疑問に、桃寧さんが直感で答える。

「そうだなあ、じゃあ——右だ。美味しそうなご飯屋さんがありそうな気がする。ちょうどいいし昼ご飯にしたいな」

腕時計を確認すると、正午をちょうど回ったぐらいだった。これから歩くことになるだろうことを思うと、しっかりと食べておきたいところだ。

「僕はご飯ものが食べたいですね」

「私は麺系が良いかな。さっぱりちゅるんとすずりた

いな」

「両方食べられるお店があったら嬉しいですね」

「ああ、そうだな」

そうしてバス停から僕たちは歩き始めた。森というには木が少なく、割と整備された道なので歩くのはそこまで苦ではなかった。アップダウンが多少あったが、まだ旅も始まったばかりということで快調に歩いていった。

「あ、桃寧さん、あっち見てくださいよ。向こう——」

「本当だ。海だ」

足を止めて、僕たちは木から見える海を眺める。

「木漏れ日ならぬ、木漏れ海ってところかな——綺麗だね」

「ええ。綺麗だと思えますよ——こんなに遠くなければ」
「全く同感だ。全然見えないね。遠すぎて海かどうかも結構怪しいよ」

感慨も感動も感傷もないような会話のラリーを行い、再び歩を進める。更に少し歩いていると、ようやく町並みが見え始めてきた。海があることで観光客の足が途切れることなく、生き残っているのであろう商店街は、まだ平成の香りを残しているように思えた。いつ出来たの

かは分からないが、かつて作られたときはもつと店舗も多かったのだろう。シャッターの閉まった店や空き地となった場所もちらほらとあるが、まだ寂れずにほどよく賑やかな風景を作り出している。

「やっど、文明が見えてきたね」

「文明って、さっきまで歩いてた道も十分文明でしょう」

ハハ、と桃寧さんが笑う。土産物屋や謎の民芸品を売っているような店を通り抜け、定食屋の風を醸し出している店の前に到着する。

「いい匂いですね。昔ながらの定食屋、みたいな見た目です」

「ああ、これは期待できそうだね」

ガラガラと、少し建付けの悪いくもりガラスのハマった扉を開ける。顔にかかる暖簾を払いのけると、店主と目が合う。

「ん、らっしやい」

これは、信頼できそうだな。無愛想な挨拶も早々に、すぐにそっぽを向いて調理に戻る。愛想がないのに続いている店は、たいてい常連たちによって支えられていた

り、確かな味によって人気があったりする。

どこに座ればいいのかと軽く辺りを見渡すと、席は半分ほど埋まっているように見えた。全部で、二十席くらいだろうか。すべてテーブル席でどこに座ろうかと迷っているとおかみさんから陽気な声がかかる。

「いらっしやいませ」。好きなところに座ってくださいね」

こちら料理中なようで、厨房の中から声が飛んできく。

「じゃあ、ここで良いかな」

座った頃に、おかみさんがお冷を二つ持ってきてくれる。

「メニユーはここにあるんで、決まったら呼んでくださいね」

いね」

「ああ、ありがとう」

「ありがとうございます」

さて、とメニユーを取り出して、二人で眺める。

チェーン店にあるようなメニユー表ではなく、ラミネートしただけの紙が一枚あるだけの簡素なものだ。メニユーの写真も、小さくていまいち見ることが出来な

い。頑張つて手作りしたのだろうが、デザイン的にはイマイチだ。

「——冷やし中華があるな。私はこれにしようかな」

「良いですね。じゃあ僕は、このカキフライ定食で」

「決まりだな。すみませーん」

早々にメニューを決定し、桃寧さんが大きい声を上げて、おかみさんと呼ぶ。

「はいはい」

と厨房から、メモ帳を片手にパタパタとやってくる。

「この、カキフライ定食と、冷やし中華をお願いします」

「えーと、カキフライ定食と、冷やし中華ですね。はい、少々お待ち下さいね」

「お願いします」

慌ただしくメモを取り、またパタパタと戻っていく。

「さて、まだ料理の完成には時間がかかりそうだね。何をして待とうか」

「マップでも見て、これから行くところを決めるのが良いんじゃないですかね」

「まあそれでも良いんだが、少しゲームでもしないか」

「ゲームですか。桃寧さん、そういうの好きですね」

「ああ、何も使わなくても出来るからね。じゃあ——この店の創業年でも当ててみるかい」

「面白そうですね。まあ探偵の推理はあとで聞くとして、僕から推理していきますね」

桃寧さんが頷き、助手である僕がまず周りを見回していく。

「まず建物は、新しくはないですよ。二十年かそこらではなさそうに見えます。居抜きで使っているという可能性もまあないと考えて良いんじゃないですかね。床はきれいに掃除されているんですが、年季の入った感じはありますよね。木を主体とした建築で、最近建てられた建物ではないのは確かだと思います。」

次にさっき見たやつですけど、メニューが少し昔の感じですね。創業当時から使っている、とまではいかないとは思いますが、これもやっぱり十五年以上は前の感じに見えます。

あとは——店主さんとおかみさんの年齢とかですね。見た感じ、六十歳ぐらいですよ。まあ二十代からやっているとしたら、四十年ですか。これが割と近いんじゃないかな、と思います。で、あとはこの店が先代と

かから続いている可能性ですけど、まあこれもないと思います。店の雰囲気的にも、あまりそういう感じではない気がしますからね。根拠はないですけど、創業三十年って感じじゃないでしょうか」

一通り推理をし終わって、結論を出す。正確に当てることは出来ないかもしれないが、大きく外していることもないだろう。

「そうか。うん、——全然ダメだね。君のは推理じゃない。当てずっぽうだ」

だが、桃寧さんから賜った評価は、全然ダメ、だった。「そんなにダメですか。良い線はいつてると思うんですけどね」

「じゃあ君は、殺人犯もこうやって当てるのかな。根拠はないけど、多分こうだから良い線はいつてると思いますが——って」

「いや、それは——」

「まあこれは、ちよつと意地悪すぎたかな。でも、今は推理なんて呼べないよ。確かな情報だけを元に、一つ一つ論理立てて組み上げていくのが推理だ。君がやっているのは、まあいいところ類推ってところだね。年齢か

ら考えるのとかは悪くはない発想だけど、それも結局見た目から年齢を当てるのが不確かだし、三十代で店舗を持ち始めていたとしてもなんらおかしくない。だからこれでは、探偵の助手としては良いリアクションだけど探偵にはなれないね」

「じゃあ、桃寧さんの推理を教えて下さいよ。そこまで言うんだから、確固たる証拠から推理できるんですよ」

頑張って考えたにも関わらず袖にされたため、少し八つ当たり気味に聞き返す。

「もちろんだよ。だから、そうカッコしないでくれたまえ。この店の創業は——今年で三十七年目だね。一九八七年に作られた店らしい」

「やけに正確ですね。そんなに言い切るってことは、どこかに書いてあるってことですか」

「気になるのなら、私がどうやって推理したのか考えてみるといいよ。これもまた勉強になるだろうし、ね」

「——じゃあまず最初に選択肢を潰しておくんですけど、この店のことを元から知っていたというのは無いですよ」

「うん、それは考えなくていいよ。私はこの店に初めて来たし、テレビとか雑誌で見たことがあるわけでもない。入店するまでに事前知識は一切なかったし、君に見えていないものが見えていることもないね。たまたま浮遊している地縛霊に聞いた、なんて不正を行っていないことを誓おう」

「それは別の探偵ですよ。とりあえず一旦メニュー表をもう一回見ますね。下の方とかに書いてあるかもしれないし」

そう言つて、脇に立てて置いてあるメニュー表を手に取り、隅から隅まで見たものの、当然ながらそれらしい情報は書いていなかった。

「まあ、何も書いていないですね。透かしてみても——意味はないか」

「さて、次はどこを調べるんだい」

「僕、完全に弄ばれてるじゃないですか——あ、同じ方を見たら何かあるとかは」

桃寧さんと向かい合っていた喋っていたせいで気づいていないのかもしれない、僕の後ろ側をしっかりと見てみる。壁にあるのは、誰かよく分からないけど有名なら

しき人との写真やサイン。世界の土産のような、何か。他に目に入るものといえば——飲食店の営業許可証。

「あの営業許可証——有効期間が令和四年から九年です。西暦に直すと、二〇二二年から二〇二七年ですよ。てことは五年周期で遡ると、桃寧さんが言った一九八七年の創業時に営業許可証を貰ったつていうのとも合致します。まあ、この場合一九九二年とかの可能性も否定出来ないですが——」

「残念、それは私の推理に含まれてはいないね。そういう細かいことに着目するというのは素晴らしいのだけれども、知識が足りなかったね。営業許可証は、更新が五〜八年くらいに一回と揺れがあるから、推理に使うことは出来ないよ。一九八七年に合致しているのは偶然だね。それらしい筋は通っているけどミスリードだね。——別に向こうは騙そうとなんてしている訳じゃないんだけど」

「はあ——これは正しいと思ったんですけどね」

とため息を吐く。もうこの席から三六〇度見渡しても、一九八七年という答えに繋がりそうな情報を見つけないことが出来ない。

「どうした、もうギブアップかい」

こちらを見つめながら桃寧さんが笑ってくる。だが、僕はこれ以上どうすることも出来ないので白旗を上げるしかない。

「——悔しいですけど、ギブアップです。答えを教えてくださいませんか。どうやって推理したのかの、答えを」

「そうだね、でもその前に——料理が来たよ」

「お待たせしました、まずこっちが冷やし中華です」

桃寧さんが軽く手を上げて、自分が注文したという意思表示を行う。

「それでこっちが、カキフライ定食になります」

空いている僕の前に、カキフライ定食が置かれる。

「ご注文の品はお揃いですかね、じゃあ伝票はこちらに置いておきますので、ごゆっくりどうぞ」

慣れた手際で料理を運んできたおかみさんが去ろうとするも、気になってしまった僕は思わず引き止める。

「ありがとうございます。ちなみに、このお店ってどれくらいされているんですか——」

「そうだねえ、八七年からしてるはずだから、今は——三七年、三八年とかかな」

「かなりの老舗ですね」

「まだまだ現役でやっていくからね、またこっちの方に來ることがあったら来ておくれよ」

「はい」

今度こそ、おかみさんが用を終えて厨房に帰っていく。態勢を戻して前に向き直ると、桃寧さんが勝ち誇ったようなニヤニヤ顔を浮かべていた。

「どうだい、私の推理は合っていただろう」

「推理の内容を教えて下さいよ」

「せっかく料理が届いたんだ、冷める前にいただくじゃないか。いただきます」

「いや、桃寧さんが頼んだの、冷やし中華じゃないですか。すでに冷めきってますよ——」

僕もいただきます、と手を合わせて食べ始める。カキフライは熱々で、炊きたてのご飯からも湯気が立ち込めていて美味しそうだ。

「じゃあ、ヒントをあげよう。私がこれまでにしたこと」

冷やし中華を啜りながら桃寧さんが言う。

「順に、って言っても特に変わったことは何もしてない」

ですからね……」

僕がレモンをカキフライにかけながら答える。タルタルソースも添えられているので、かけるのは半分だけに留めておく。

「桃寧さんは別にこの席を立ててないですし、辺りを見渡しただけ。スマホとかを開いたわけでもないですし、それこそ同じ条件だと思っただけです」

「そうだね。さっきも言った通り、『入店するまでに事前知識は一切なかった』よ」

からしが多く入っているところを食べてしまったのか、ツーンとした顔をしながら補足する。だが、桃寧さんの言い回しが少し引かかった。

「さっきも言ってましたけど、入店するまでに知識がなかったっていうことは、この席に座るまでに何か書いているのが見えたってことじゃないんですか。その辺のドア前とかからなら、僕の後ろにある柱の裏側もチラッと見えるはずですし」

熱々のカキフライを頬張りながら推理をする。口の中をやけどしそうになって、慌てて水を口に含んで冷ます。

「残念、着目する視点としてはは良いんだけど、正解をあげることはできないね」

「うーん——だとすると、他のお客さんの会話じゃないですか。僕は聞いていなかったけど、桃寧さんはたまたま聞いていたとか。それなら入店してからですし、合理的です」

「それも違うね。むしろ、真相から遠ざかってしまっているよ。さっきの推理のほうはかなり惜しい」

「さっきのが惜しいってことは、やっぱりどこかに書いてあるっていうことで合ってますか」

「まあ、そうだね。私は入店してから一九八七年という文字をどこかで見て、君にクイズを出したわけだ」

「そんなの、桃寧さんが勝つのが分かかってクイズを出してきたでしょ」

「ああ、そうだよ。悔しいのかい」

そう言って不敵に微笑む。

「——悔しいです。こんな勝負に乗ったことが」

「でもねえ、犯人は用意周到に計画を立てるけど、巻き込まれた探偵にはよくて数日しか与えられないからねえ。事件も選べないときが多いし」

「それはそれ、これはこれでしょう」

「ま、それもそうだ。でも、私の勝ちだね」

「それで、どこで見たんですか」

「君の着眼点には素晴らしいものがあつたんだが、残念ながら詰めが甘かったね。正解は、入店する瞬間だよ。まあ、帰るときに見てみるといい」

ちようど完食したようで、桃寧さんが自分のコップに水を注いでいく。ジェスチャーで僕も飲むかと聞かれたので、コップを差し出す。

「ありがとうございます」

「ああ。まあゆっくり食べるといい」

僕はまだカキフライが少し残っているので、慌てて食べる。僕が食べているのを桃寧さんは黙って眺めていた。威圧にはならないくらい、心地よい沈黙。それは少しの間続き、いつしか時間が止まっているかのように思えた。

カチャ、と僕が箸を置く音を皮切りに、再び話が始めた。

「冷やし中華はかなり美味しかったよ」

言外に、それはどうだったのか、ということ聞かれ

ているのだろう。

「カキフライも美味しかったですよ。また来たいですね」

「ああ、そうだな。腹ごしらえも終わったし、そろそろ出発しようか。行き先はどうなるか分からないがね」

「ごちそうさまでした。と二人で手を合わせる。あまり多くもない荷物を手に持って立ち上がると、またパタパタとおかみさんがレジの方に駆けてくる。

「お会計は、えーとこれだから、合わせて一八〇〇円です。ご一緒に良いですか」

いつも通り、僕が財布を出す。

「はい、一緒でお願いします」

お釣を受け取り、店の出口へ向かう。

「さて、答え合わせの時間だ」

「ありがとうございます、という声を後ろに聞きながら、扉を開ける。軽く振り返って会釈をしつつ、扉を閉めると、そこには『since 1987』というオシャレな装飾があった。

「想像以上にしっかり書いてますね」

「真実は何気なく、ありふれたところに存在するということだよ。さて、次はどこに向かうか」

水族館

僕は昼ご飯を食べ終わり、また歩き出した。方角的には、北に向かっているのだろうか。眼の前に続いているのは長い一本道で、不安になり僕が尋ねる。

「この先、なにかありますかね」

「ああ、そういえば水族館があったことを思い出してね。今そっちに向かっているよ」

どうせ、『何があるか分からないから良いんじゃないか』とでも言われると思っていたので、目的地がしっかりあったことに少し驚いた。

「じゃあその水族館に昔行ったことあるってことですか」

僕が続けて質問をすると、桃寧さんは少しためらいながらも「ああ」と軽く答えた。

桃寧さんは、あまり自分の過去のことを語りがらない。僕も自分の過去は出来ることなら忘れたいと思っ

ているので、その気持ちは分かるのだが、なんとなくこれは聞いても良いのではないかと思われた。特に根拠はないし、絶対に知らなければいけないことでも、多分ない。話したくないというのであれば、それを否定できるほどの過去を僕は持ち合わせていない。それでも、知りたいと思った。好きな人のことを、すべて知って受け入れたいと願うことは、そう悪い感情ではないはずだ。

「いつ行ったんですか」

軽く流すように、いつも通りの会話のように、今を語るように過去に触れる。重い空気が流れ、僕がそろそろ話題を変えようかと逡巡し始めたところに、桃寧さんが口を開く。

「大学生の頃だな。たった一回きりだったが」

「そうなんですな」

平然と僕も言葉を返す。至って変なことではないはずだ。むしろ、どうしてこんななんでもないようなことを躊躇っていたのかというほどの、普通のこと。少しだけ特別な、ただの日常にすぎない。でもその出来事は、とても奥に大事にしまわれていたようだった。触れれば割れてしまうのか、あるいは使われていないのか、不要だ

から押し込まれていたのか、見ないようにしたのか。

「誰かと一緒に——」

とさらに聞こうとしたところで、桃寧さんがこちらを見つめていることに気づく。これは、これ以上聞いてくるなどということなのだろう。言いかけていた言葉をひつこめ、別の無難な言葉を探す。でも、あいにく僕の辞書には適切な見出しが載っていないかった。

「すみません、余計なこと聞いてちゃって」

代わりに出てきたのは、謝罪の言葉。

「いや、君が謝るようなことじゃない」

桃寧さんは優しいから、僕に本気で怒ってきたことはない。いつだって余裕のある表情を浮かべながら許してくれる。

だから、僕は、すぐに謝ってしまう。それですべて精算されてしまうから。何もなかったかのように許してくれるから。これはとても、ずるいことだと思う。治さないといけないことなのに、こんな僕すらも桃寧さんは許してしまふから。僕は許されてしまふ。どうしようもない、こんな僕を。

せっかくなら、桃寧さんも悪人であれば、共に堕ちる

ことが出来たのに。

「君にはどこまで喋ったことがあったっけ。いや、喋ったことは多分ないか。私の大学時代の話は」

「——何も知らないといつても過言じゃないですよ。大学に行っていたというの、こうして聞いたのは初めてですし」

僕は恐ろしいほどに、この人のことを何も知らない。それが悔しくて、つい負け惜しみみたいなのを言ってしまう。本当は狂おしいほどすべてを知りたいのに。

「ああ、確かにそうかもしれないね。私は昔——もちろん君と出会う前、ただの大学生として過ごしていたんだ。至って普通の、ただの文系の女学生だ。そのときの友人たちと行ったんだよ——」

そう語る桃寧さんは、慈しむような顔をしていて、友人が今どうしているかを聞くことは出来なかった。おそらくもう、その友人たちは会えないところで就職している、あるいは——。

「今思い返すと、私が友人と旅行に行ったのは、その時が初めてだったんだな。まあ日帰りだから、旅行というほどのものでもなかったけれどね。仲は良かったと思っ

ただだけどね。

みんな、死んじやった」

実に呆気なく、道が混んでいたから五分遅刻したんだと言いつけるように、なんでもなく。死んだという事実を淡々と告げる。こうして語れるようになるまでに、どれほどの年月が経ったのだろうか。今もまだ、無理をしているのかもしれない。桃寧さんの表情は、仮面をつけているのかのように読み取りづらい。今の桃寧さんの微笑も、ただ貼り付けているだけなのかもしれない。本当のところは、本人にしか分からない。本人ですら分かっていない心の内側に押し込んで、見ないようにしているのかもしれない。霽がかかったかのように、大切な思い出をしまいこむように、それは誰にも見えないのだろう。僕にはその奥を覗き見ることが出来ないことが、なんとなく悲しく思われた。

過去があったから、今がある。でも、過去を思い見ることとは出来ても、過去に生きた桃寧さんのことを同じ視点で見ることとは出来ない。過去には行けない。桃寧さんが感じたことを、僕は完全には理解出来ない。それがたはどうしようもないのに悲しかった。

「ま、こんな暗い話はやめておこう。しても面白いもんじゃないし、ね」

「そうですね」

しばらくの間、沈黙が続いた。僕はこういうときに言うべき言葉を知らない。たいてい桃寧さんが話し始めるから。また、甘えているだけだ。僕はただ過去から逃げ、今からも逃げている。いずれ来るツケを払うときになつてはじめて、僕はことの重大さに気づくのだろう。

緩やかな上り坂を上り、少しカーブを抜けた先に、大きな建物が見えてきた。

「バスが結構多いですね」

歩いている間に、三台ほどのバスに追い抜かれた。目の前にも、ちょうど今到着した便が見える。きつと、普通は駅とかからバスに乗ってくるのだろう。自家用車などで来る人のための駐車場も広くあり、僕たちのように歩いてくるのはごく稀なことは、容易に推察出来た。

「まあ割と歩いてきたからね。というかこんなに遠いとは思わなかった。前来たときはバスに乗っていたから、目測を誤ったな」

「ちゃんと運動したなあっていう疲労感がありますね。」

普段桃寧さんは運動していないから、ちょうど良かったんじゃないですか」

「いや、疲れていては良いパフォーマンスは出来ない。帰りは絶対にバスに乗るぞ」

そう言うと、バスの時刻表を見始める。まだ入館してもないのに、帰りにどのバスに乗りそうかなんて分かるんだらうか。僕だったら時刻表を見ても、絶対に覚えていられない自信がある。軽く目を通し、よし、という風にこちらを振り返る。

「じゃあ、中に入らうか」

「そうですね——僕たちはチケットなんて持っていないけど、入れるんですか？　なんか今日は平日なのに人が結構いますけど」

「……多分大丈夫だろ」

こうも人が多いのは桃寧さんも想定外だったようで、焦っているように見える。子供連れや大学生くらいのグループ、老夫婦など、老若男女が大勢いる。なにかイベントでも開かれているのだらうか。

「とにかく、こんなところで突っ立っていても仕方ないんだ。チケットを買いに行くぞ」

当日チケットを買う列は混んでいるわけではなく、すぐに受付のようなところに着いた。チケットを持っている人はそのまま入れるようだが、僕たちは持っていないので別のルートである。周りの売店やフードコートにあふれている人も、今来たわけではなく、むしろ今から帰る前にお土産を買う、あるいはご飯を食べて帰るところなのだらう。前に並んでいる人は誰もおらず、すぐにスタッフさんの元にたどり着いた。

チケットを二枚買おうと意気込んでいると、目の前のスタッフさんから、申し訳なさそうに伝えられる。

「誠に申し訳ありません。本日すでに満員でして、チケットの販売は行ってないんですよ……」

思わず桃寧さんの方を見てしまう。桃寧さんもこちらを向いていた。苦い顔をしているように見える。

「そちらのショップとフードコートはチケットなしでも入ることが出来るので、良ければそちらに……」

絶句して固まってしまっていた僕たちに、助け船が出される。

「そうなんです……ありがとうございます。」

と言って当日チケットのブースから立ち去る。ショップ

プに向かう途中で、桃寧さんが何かに気づいたようだ。

「ふむ、そういえば今日は県民の日だったのか」

視線の先を見ると、県民の日だからチケットが半額になっていると書かれていた。

「そんな日があるんですね……はじめて聞きましたよ……」

「ああ、私も完全に頭から抜け落ちていたな。別に国民の休日というわけでもないし、な」

「あんなにシヨップが混んでいるのに、チケット売り場が空いているから嫌な予感したんですね……」

「まあそう落ち込むな、助手。ここにいる子供連れはこんな機会じゃないと来れないかもしれないが、私たちはどうせいつでも来れるんだ。探偵ほどの自由業はそうないぞ」

「それもそうですね。次はちゃんとチケットを取って来ようか」

「ああ、水族館の中は次回にお預けということだ。それに、私たちのメインの目的地はここではないんだ。今日は鳥居を見に来ただけだから。——ま、一旦お土産でも買ってからバスに乗ろうか」

平日だというのに、土産物屋はやけに賑わっていて身動きを取るのも難しいほどだった。特に、子供連れが多い。小学生以下は入館料が無料になるらしく、それを機に家族で来ました、という風な見た目だ。ぎゅうぎゅうになりながらも、店の中を巡っていく。

大きなイルカやカワウソのぬいぐるみを抱えた子供が、広くもない通路を走り回っている。

「ふふ、元気なもんだな」

桃寧さんがそれを見て笑みをこぼす。

「それにしても結構いろんなものが置いてますね。サメ推しがなんか強いですけど」

「種類がやっぱり多いからかな。ん——このシユモクザメの箸置き、良くないか？」

珍しく桃寧さんのテンションが目に見えて上がっている。手に取ったものを見てみると、シユモクザメの背びれと尾びれの間、箸の先を置くことができるらしい。キラキラとした、手に置いた箸置きを見つめている目は、周りにいる子供とあまり変わらない。

「箸置きだったら持ち帰りやすいですし、お土産はそれにしましょうか。入れなかったという記念付きですが」

「うん、そうだな」

お金の管理とかが苦手な桃寧さんに変わって財布は僕が握っているんで、こういう買い物の時は僕が許可を出す。大元のお金自体は大体桃寧さんのものなので、いわゆるおこづかい制みたいなのだ。桃寧さんは時折変なものを買ってしまうので、自らを制限するためにそう志願してきた。実際、変なものは事務所にいくつか増えているが、そのペースは落ちていく。

「あれ、二つも買うんですか」

桃寧さんは、すでに手に持っているのにも関わらず、棚からもう一つ取ろうとしている。

「——そりゃあ君の分も、ね。おそろいは嫌だったか？」

桃寧さんはこちらを見て、いたずらのバレた悪ガキのような顔で笑う。

「そんなわけないじゃないですか」

この人は、僕の照れる顔をどうも見たいらしい。でもそれも癪なので、顔に出ないように努める。

ふーん、ともう僕をからかうのは飽きたような声を出す。「さ、これからどうしようか」

「お昼ご飯は食べたところでし、フードコートも混ん

でますからね……次に行きましようか」

「ああ、ではこれだけ買って、バスに乗るぞ。絶対に」

「桃寧さん、思ったより疲れてます？」

「そんなことがあるわけじゃないか。私は探偵だぞ。体力はあるに決まっている」

「探偵にあんまり体力自慢のイメージ無いですよ」

「でも、『武闘派の探偵の皆さん』って声をかけたら、柱の裏から大勢登場するというシーンはドラマにあったじゃないか」

「懐かしいですね。でもあれは原作にないシーンなので、ノーカウントです」

「じゃあホームズはどうだ。曲げられた鉄の火かき棒を元に戻していたじゃないか」

「それは体力というか筋力では」

「かくなるうへは……何かあったつけ他に」

「僕はそこまでミステリ読むわけじゃないから思いつかないですよ。てか僕に聞かないでください。言い争って相手なんだから」

ハハ、とお互いに笑う。僕たちは普段から、本当になんでもない、こんな会話ばかりしている。端から見れば

滑稽に見えることだろう。一体何の話をしているのか、僕たちと同じ作品を見ていないと、そもそも内容も分らないかもしれない。過度に醸成された内輪ノリは、外での面白さを犠牲にした分面白くなる。

「そういえば桃寧さん、さつきバスの時刻表見えましたよね」

「ああ——ただ残念なことにあと十五分後だよ。バス停で待つのも暇だし、どうする？」

「十五分ですか——なんとも微妙ですね。フードコートは混んでますし、そもそもあんまりお腹も空いてないですし。あんまり遠くまで行くわけにもいいかないですからね」

店内を後にしてバス停の近くまで来てみたは良いものの、わずかに暇な時間ができてしまった。

「そうだな……そっちの方にいくと海が見られそうじゃないか」

桃寧さんが、海の方を眺める。僕もそちらに顔を向けてみると、確かに階段があつて少しだけ下の方まで行けそうだった。

「じゃあ、ちょっとだけ見に行きますか」

「ああ」

階段は、遠くから見ていたのでは分からなかったが、ほんの十段ほどしかなかった。降りた先も海とはまだまだ離れたところで、柵越しに眺めるのが限界だった。それでも波音は眼下から聞こえてくるし、潮の香りを強く感じられた。左の奥の方に埠頭が見える。釣りが禁止されているのだろうか。あるいは立ち入りすら禁止の可能性もありそうだ。短い埠頭には誰もいない。何か代わり映えがあるわけでもなく、ただなだらかでどこまでも続くような海面が揺らめいていた。

「なんかこういう、自然を見てると心が洗われるような気がしますよね」

「そう、だな」

珍しく桃寧さんの歯切れが悪い。それが気になってつい、聞いてしまう。

「なにか思い出すことでもありましたか」

ああ、と肯定しながら、桃寧さんがかすかに笑う。

「薄汚れた心には、忘れられない思い出があるんだよ。洗いきれなかった罪も、ね」

その笑顔は、美しくあることを運命づけられて作られ

た造花のように思えた。いつかこの人の過去を知ることができるときまで、僕は忘れられないのだろう。あるいは、知ったとしても僕の心に刻まれた、忘れられない思い出になるのかもしれない。何かを隠した笑顔だったとしても、心が汚れているのだとしても、僕は美しいと思った。

「さ、そろそろバスの時間だ。戻ろうか」

はい、と言って僕は着いていく。過去に何があろうとも、僕たちは今を生きているのだから。

二百三十六段

桃寧さんの『よし、鳥居に行く前にここで降りよう』

の一言で降りた場所は、ストリートビューで降り立った光景の、まさにその場所だった。

「——すごい、朝パソコンで見た画面とは全然違いますね。絶景ですよ」

「ああ、そうだな」

「この辺りまで来たら、目的地の海に浮かぶ鳥居も近そうですね」

「よく気づいたね」

「いや、なんとなく雰囲気に近いなと思っただけで——桃寧さん、もしかしてそっちも行ったことがあるのか」

僕が少し驚きながら聞くと、当然という風に答える。

「朝、ストリートビューで見た景色じゃないか。まったく、助手はそんなことも忘れてしまったのかい。私は昔行った水族館に近かったなんて、まったく知らなかったよ」

「いやいや、あんなバツと見ただけで道を覚えられたら苦労しませんよ。というか、それならなんでバスは乗り間違えたんですか」

「それとこれとは話が別だ。だって、この景色は確かに朝、パソコンの画面で見たじゃないか。一方のバスはというと、パソコンで調べてもないし乗ったこともないから知らないわけだ。つまり、間違えてもしようがない。筋は通っているだろう」

完璧な理論だ、と言わんばかりに威張っているが、やっぱりこの人は自分のステータスのパラメータの振り方を間違えている気がする。

「筋は通ってても珍しいですよ。写真記憶並に覚えてるのにバスを乗り間違える人は」

「まあでも、君の方向音痴よりはマシだろ——君ならこうやって海にたどり着けるかどうかも怪しいし」

「流石に最近はそのままでひどくないですからね。——スマホさえあれば」

「ようやく地図を読めるようになったって言うていたが、君は地図を読むんじゃなくてマップに表示された青い線を辿ることしか出来ていないじゃないか。紙の地図を渡

されても読めなそうだが、どうなんだ」

ニヤニヤとこちらを見ながら、桃寧さんが言ってくる。僕が地図を読めないし方向音痴というのは、本当なので何も言い返せない。ついこの間、事務所からスマホを持たずにスーバーに行ったところ、工事のせいで回り道を余儀なくされたことがある。その結果、いつも行っている近所のスーバーは歩いて五分で着くはずなのだが、往復で二時間かかってしまった。買った食料品を小脇に抱えて、ほうほうの体で何故かスーバーと逆方向の道から帰ってきた僕の姿を見て、桃寧さんは大笑いしていた。腹が立ったので、その日の晩ご飯には桃寧さんの分だけ、野菜を多めに入れておいた。

「とにかく、目的地が近いんですよね。あとどれくらいで着くんですか」

流れを変えるために、露骨に話を逸らす。一通り嘲笑い終わったのか、機嫌よく桃寧さんが喋ってくれる。

「ああ、目的地の海にある鳥居自体は近いんだけど、一旦その前に別のところに行くよ」

「また寄り道ですか。でも朝見たときに、このあたりにはお店とかはあまり無かった気はしますけど——」

「いや、絶対に君も見ただよ。というか、鳥居があるんだからこっちには行かないといけないだろう」

「てことは——神社の本殿ですか」

軽く思考を巡らせて、朝見た記憶を思い出す。

「そういうことだ。まずは神様に挨拶するところから始めよう」

トコトコと歩いて行くと、右手側に長い階段が見えてきた。沿岸部には店が多く、車通りも激しい中で、少しばかり異質な雰囲気を感じてそびえ立っている。明らかに人為的に残されている自然の中に、綺麗に整備された階段が立ち上っている。これが、神の頂へと至る道なのだと思わせるほどに圧巻だった。

階段の手前には、巨大な鳥居がここを通る人間を選別するかのごとく存在する。ただそこに、あるだけで威圧感を放っていた。

「想像以上に大きいですね——」

「ああ、やはり画面越しで見るとは、まったくもって印象が違うものだな」

「確か参道は、神様の通り道が真ん中だから、人間は横を歩くんでしたっけ」

「そうだな。といっても、真ん中にはロープで手すりを作ってくれているから、必然的に横を歩くことになるんだがな。というか、神様は普通に人間と同じように歩くのだろうか」

「飛ぶことはできそうですけど、飛ぶのは疲れるんじゃないですか。だから普段は歩いているとか」

「まあそう考えると、作法は筋が通っているか」

そう言つて桃寧さんは階段の一段目に両足を乗せて立ち止まった。

「むう——無理か」

「桃寧さん——今、階段を登りたくなさすぎて、石段がエスカレーターになつている可能性にかけましたね」

「残念ながら違つたな」

「むしろエスカレーターだつた方が怖いでしょ。一步目踏み出したら急に動き出すんですよ」

僕が呆れながら言つと、渋谷という風に登り始める。

一段一段はあまり高くなり苦も無く歩を進めることは出来るが、いかにせん段数が多い。

「思つたより骨が折れるな。もつと楽な坂道とかはないものなのか」

「そんなないでしょ。神社つてだいたいこういうしんどい階段を登つた先にあるものじゃないですか」

「まあそういうものでもあるが、今は何でもバリアフリー化する時代なんだ。神社にエスカレーター、いやエレベーターがあつても驚かないね」

「大阪城じゃあるまいし、これくらいの規模じゃそんなのをつけるお金はないですよ、多分」

階段の半ばまで差し掛かつた辺りで、階段の雰囲気が変わる。これまでは整備された階段というイメージだったものが、天然の石を使った野生の階段へと変化する。脇にそれる道と交差するところから、一気に登りづらくなつてきた。

「なんか急に、階段の石が登りづらい感じになつてきましたね。さっきまでと違って、昔の人が石を積んだみたいな感じで、足にきまずね」

「ああ、同感だ。特に、一段ごとに傾きもバラバラだから辛いな。経年劣化なのか、落ちる方向に一段一段が斜めを向いているのがいやらしいな」

一步足を滑らせるだけで大事故になつてしまひそうなので気をつけながら、踏みしめるようにして登つて

いく。

「でも、あと少しでてっぺんですよ」

「そうだな。だがあと少しというところが一番危ないんだ、気を抜くなよ」

「ええ、そこまでまぬけじゃないですよ」

「そういうやつほど、すぐに死ぬものだな」

「言えますね」

頂上まで後数段を残した頃、右手側に手水場が見えてくる。ちよろちよると龍の口から水が溢れだしており、なんとも言えない風情が感じられる。三体並んだ龍の口の前には同じく三本の柄杓が置かれており、各々一つずつ柄杓を持つ。

「こういうときの手順ってどうするんですたっけ」

「んー、本来は右手、左手を清めた後に、右手に水を溜めて口をすすぐんだが、手だけでいいだろう。こんなご時世だし、そもそもこの水が綺麗かどうか怪しいからな」

「そうですね。じゃあ手だけ綺麗にしましょう」

柄杓で水をすくい、手にかける。暑さがまだ厳しい今の季節には、ちょうど良い冷たさだった。

ハンカチを取り出し手を拭きながら見渡すと、本殿と思われる社の手前に、地蔵のようなものが見えた。

「あれ、本殿以外にも賽銭箱と——お地藏様かな、が見えますね」

「そうだな、神社にお地藏様がいるなんて珍しいね。

じゃあ先に挨拶していくか」

「——お地藏様には、二礼二拍手一礼で良いんですね」

「——どうなんだろう。なんか違う気がするよな。多分一礼して手を合わせるぐらいで、良いんじゃないか」

珍しく桃寧さんの歯切れが悪い。なんでも知っていると言わんばかりに知識を持っていそうだが、どうやらこれは知らなかったようだ。

「なんでもは知らないよ。知っていることを増やしているだけだ。まあ少なくとも君よりは知識があるが、ね」

こうして喋っていると、一人の男の子が駆け寄ってきた。元氣ハツラツといった感じで、見たところ小学校低学年ぐらいだろうか。

「兄ちゃん、姉ちゃん、地藏さんへの参り方は、やり方とかじゃなくて、気持ちが大事なんだぜ！　じいちゃんも言ってたからな！」

「——ああ、そうなのか。ありがとう。少年、名前は」

桃寧さんが足を折り曲げ、男の子と視線を合わせる。

つられて僕もしゃがむ。

「俺の名前は、やまとだよ！ 四年生！ 姉ちゃんの名前は？」

ビックリマークが何個もついていそうな喋り方で答えてくれる。

「私の名前はもねだ。あとこっちの男は私の助手のあねだ」

「助手？ ていうか、男なのにあねなんて変な名前！」

「はは、私は探偵だからな。助手がいるのは当然だろう」

「探偵ってことは、コナンだ！ 姉ちゃん、コナンなんだ！」

「まあ、似たようなもんだな。真実は、いつも一つ——ってな」

意外なことに、桃寧さんとやまと君の話が弾んでいて僕には話に入る余地がなかった。無愛想な感じを装っているが、桃寧さんは割と子どもとかぬいぐるみとかの可愛いものが好きらしいのだ。

そうして談笑を眺めていると、奥の方から老爺が歩いてくる。

「あ、じいちゃん！」

話の流れと風貌から想像はできていたが、予想通り、やまと君のおじいさんのようだ。神職にふさわしい白い着物を着て、口には立派な口ひげをたくわえていた。やまと君は普通に小学生らしい服を着ているので、やはり雰囲気異なっただけで感じられる。

「どうもどうも、孫が迷惑をかけてはしませんでしたかな」

「いえいえ、迷惑だなんてそんなことありませんよ。やまと君がこの神社のことを教えてくれたところですよ」

白い着物を纏い、白髪が目立つ髪と完全に白く染まったヒゲを生やした老爺と対照的に、全身が黒い桃寧さんが会話をしている。やはり桃寧さんは、初対面の人に対してはマトモな人のように見える。服だけではなく、社会性も身に纏っているらしい。

「そうでしたか、それなら良かった」

ホホ、と笑いながら老爺がやまと君の方を向く。老爺は笑っているように見えるが、やまと君は何かを察した

のかビクツとする。

「やまと、宿題はやったのかい？」

「……今からやる」

「よろしい」

不貞腐れながらも、すごすごと裏にあるのであろう住居の方に向かっていく。

「いやー、孫つてのは目に入れても痛くないもんですが、甘やかしすぎると息子に怒られますんでな。こうして儂も心を鬼にして勉強をさせにやなんのですよ」

「そうですね。かわいいものですね」

「して、野暮なこととは存じますがね——お二人さんはどのようなご要件で？ 平日の昼間にこんな寂れた神社に来るとは、夫婦で旅行でもされている感じがすかな」

僕が焦ってどう誤魔化そうかと思っているうちに、ハハ、と軽く笑いながら桃寧さんが答える。

「我々は夫婦ではないですよ。ただの、探偵と助手です」

「——探偵、ですか？」

「ええ、探偵です。こんな風に名刺もあります」

と、持っているカバンからスツと名刺を取り出して差し出す。

「これはこれはご丁寧に。あいにく手元に返すものがございせんもので——見ての通りこの神社の当代宮司を行っております、寺尾公彦きよひこと申します。先程の、大和の祖父です。この度はこんな所までよくお越しくださいました」

宮司さんは名刺代わりに名乗ってくれる。さすが神職といったところで、さっきまではただの好々爺といった印象だったのに、空気が一気にバリツとアイロンでもかけられたかのように引き締まった。二人が名乗っているのに僕だけ名乗っていないのは良くないので、僕も最小限を喋る。

「そちらの探偵の助手をしています、あねと申します。よろしくお願いします」

「あね……さんですか、どのような字を書かれるの？」
「色の紫に、植物の茜であねと読みます。いわゆるキラキラネームの当て字です」

と自嘲気味に説明する。いつもと変わらない、慣れた説明だ。人生でこのやりとりを何度やってきたかも分からない。もっと簡単な名前だったら、こんな説明ではなく、別のことに時間を使えたのに、と思ってしまう。

「良いお名前ですね。茜——ということ、九月頃のお生まれですか」

「——ええ、そうです」

誕生日を当てられたのは初めてなので、かなり驚きが表情に出てしまう。

「茜は秋の植物ですから。これからの季節、あちらの山の奥の方に行くといえていますもので、だいたい九月ごろになるとよく見かけるものです。それでそうなのではないかなと思った次第です——」

自分の名前なのに、いや、嫌いな自分の名前だからこそ、知らなかった。僕は茜を見たことがない。見ようとしなかったというよりも、見ないようにしていた。僕はこの名前が——。

「なあ助手、秋になったら見に行こうか」

桃寧さんの突拍子のない提案に、思考が打ち切られる。この人は、何も考えてないように見えてすべてを見透かしたようなことを言う。だから、探偵なのだ。だから、岩永桃寧たりえるのだ。

「はい、行きましょう」

秋に向けての楽しみが生まれた。お互いに優しく微

笑む。

会話が一段落した頃、宮司さんから神妙とも軽妙ともいえないような面持ちで話がまた始まる。

「そういえば、探偵さんということなら軽くご相談があるのですがよろしいでしょうか……？」

「うちの探偵事務所は、相談料は無料ですよ。内容にもよりますが、重要そうな話ならどこか屋内の部屋とかでも——」

と桃寧さんが提案すると、それに慌てたような風に顔の前で手を振り宮司さんが否定する。

「いやいやそんな大層なものじゃないですよ。ただ、狒犬がいつの間にかそっぽを向いているというだけで——」

「狒犬が、ですか」

それがやけに不思議に感じ、僕が思わず聞いてしまう。狒犬といえば、二匹で真ん中を向いて、訪れる人間を守っている魔除けだったはずだ。その魔除けがそっぽを向いているというのは、どういうことだろう。

「実際に見ていただくのが速いのかもしれませんが、ちょうど先程元の位置に戻してきたところなので——」

「ええ、それでも構いませんよ。元の正しい位置でも分かることは十分あるはずなので」

桃寧さんがワクワクした顔をしている。ということはい。

「あの——僕はこういうのは初めてなんですが、探偵さんに依頼をする場合、お代はどれくらいになるものなんでしょうか」

「ああ、今回はお代は無くてもいいですよ。面白そうなので」

やっぱりそうだ。

宮司さんがホツとしたような顔をしている。相談料が無料なんてことを言ったから、実際に事件が解決されたときにはどれだけお金がかかるのか分からなくなってしまった。ちなみにこういった旅先で事件に首を突っ込んだときにお金を貰ったことは、ほとんどない。僕たちは別にお金を稼ぎに来たわけではないのだからそれで良いんだけど、職業探偵としてはもう少し推理の安売りをやめてほしいと思う。まあそれを言ったとしても、それで楽しいことを辞めるような人じゃないから、特にこれ以上言うことはないのだけれども。

「——ありがとうございます。それでは、案内いたします」

宮司さんに引き連れられて、神社の正面の方に行く。どうやら僕たちが登ってきた石段は、正面ではなかったらしい。道理で、鳥居もないしお地藏様が出迎えてくれたわけだ。

「ということは、僕たちが登ってきたこの道は正面ではない別の道だったということですかね」

「まあ、そうなりますね。今向かっているのが神様用の正面玄関だとしたら、こちらはお地藏様用の勝手口です。もともと神社があったのですが、一昔前にあのお地藏様がお見えになったので、そのときに道を新しく作ったようですね」

「ほう、そういうこともあるものなのか。神社に地藏とは、おもしろい」

「昭和の初め頃のことですから、戦争と戦争の狭間で神にも地藏にも縋りたい気分だったんでしょう。あとは公共事業としての側面もあったようですね。神社からの依頼として石段を作って、その対価にお金を払う。そうして働き口として地域住民を助けていたとか」

「素晴らしき助け合いの精神だ」

「ええ、全くだす。僕もそれを見習わんといけません」

そう言つて宮司さんは襟を正す。僕たちも、昔ながらの良い精神を持つて生きていきたいものだ。

「あちらが、件の^{くだん}狒犬です。先程戻したのでちゃんと内側を向いているのですが、たまに互いにそつばを向きあつておりまして」

「うーん、特に変哲なところもない、至つて普通の狒犬に見えますね——」

「ああ、そうだな。ちなみに宮司さん、この左側の狒犬は獅子なんでしたっけ」

「よくご存知で。社に向かつて右側が獅子狒犬で阿形、左側が狭い意味での狒犬で吽形ですな。まあ他の神社では違うこともあるらしいのですが、うちではオーソドックスなこの二匹です」

狒犬にそんな違いがあることを知らなかった。阿形と吽形といえば金剛力士像だったか、五十音のあからんまでを表していて、物事の始めから終わりまでを見守ってくれる、みたいなものだった気がする。

「では宮司さん、狒犬を動かしてみてもよろしいでしょ

うか？ 元の位置に戻しますので」

と桃寧さんが尋ね、それを宮司さんは快諾する。

「じゃあ、助手。動かしてみてくれたまえ」

「——桃寧さんがやるわけじゃないんですね」

「ああ、もちろんだろう」

「何ももちろんじゃないですよ」

そう言いつつ、近くにあつた獅子の方に手をかける。

獅子狒犬は台座に乗っており、一番上の高さは僕の身長と比べても変わらないくらいである。上に乗っている獅子狒犬に触れるのも良くない気がするので、台座の一番上の角の部分を掴む。対角線上に角を持ち力を込めると、思ったよりも軽く台座は回転した。

「見た目よりも軽く動きますね。何回か回されたおかげか、地面も抵抗なく平らになっていますし」

僕が手についた苔や砂を軽く払いながら言うと、宮司さんが付け加える。

「ええ、狒犬は石でできていますが、台座の中は空洞になっているようでして、持ちあげるのとはとかく、動かすのは簡単に出来るのですよ。大人なら誰だって動かせるくらいの軽さです。それこそ、少し力を入れれば

女性でも動かせないことはないでしょう」

「そうですね、僕もそう思います。じゃあ、元に戻しちゃいますね」

「ああ、もう戻して大丈夫だ」

「桃寧さんは触ってみなくて大丈夫ですか」

「問題ない。手が汚れてしまうからね」

「——僕の手は汚れてるんですけどね」

さつき持ったところをもう一度持ち、今度は逆向きに回転させる。苔が取れて持ちやすくなっており、より簡単に元の向きに戻すことが出来た。獅子狒犬や台座の上部分は掃除をしているようで苔は付いていなかったが、台座は一面苔がむしっている。

こうして全部の面を眺めてみて、僕はあることに気づいた。

「この台座の真ん中ぐらいの高さのところ、一部分だけ苔が取れてますね」

僕が言うと宮司さんも腰を曲げてその部分を見る。

「おお、確かに——」

この狒犬の謎が分かった気がする。これは、そういうことなのだろう。

桃寧さんの方を見てみると、正解だと言わんばかりの顔でこちらを見ていた。

「気付いたかい、助手よ」

「はい、おそらく。分かりました、狒犬がそっぽを向いている理由が」

宮司さんが狒犬から僕たちに視線を移してくる。

「おお、何か分かりましたかな」

「はい、これは怪奇現象でも事件でもなく、大和くんのいたずらでしょう」

「大和が、ですか」

「——ええ、大和くんが触れるぐらいの高さの苔だけ取れてますし、そこまで重くないので回せるんじゃないでしょうか。実際に見たわけじゃないので確実なことは言えませんが」

「——そうでしたか。それはそれは」

と言って宮司さんは口ごもる。

宮司さんが口を開くのを待っていると、大和くんが駆け出していくのが遠くに見える。

「いつてきまーす！」

と、サッカーボールを抱えたまま、僕たちがひいひい

言いながら登ってきた方の階段を駆け下りていく。

「気をつけて行きなさい、大和」

宮司さんの声に、うん、と返事するのが反響して消えないうちに、大和くんはもう見えなくなっていた。

「――孫の成長は早いもんですな」

「――そうですね」

僕も温かい目で見送る。

「いやはや、こんなことに探偵さん方を付き合わせてしまい、申し訳ない。儂でもすぐに気付かれるような、簡単なことでしたな」

宮司さんの自虐ともとれる言葉に、桃寧さんが答える。

「真実は、意外と単純なものですよ。ただ、時に気づきにくくなっているだけで。」

それでは私たちはこれからお暇することになります。海の方の鳥居も見たいと思っております」

「――ぜひ、ご覧にいれてください。もう少ししたら夕日が綺麗に見えるはずです」

「それは楽しみです」

僕たちはそうして、神社を後にする。行きとは違う、

神社の正面階段から降りることとした。歩きながら、

「それにしても、どうして宮司さんは気づかなかったんですかね。ぶっちゃけ、怪奇現象とか事件とかよりもすぐにいたずらだっと思いつきそうなものですけど」

と僕は尋ねる。

「それは、大和くんが孫だからだろう」

「――どういうことですか」

「親戚――あとは近所の人とかが、『こんなに大きくなったのね』みたいなことをよく言うだろう。孫というのは、知らない間に成長しているんだ。宮司さんの記憶の中では、大和くんはまだ初めて歩いてからそう時間が経っていないんだ。本当はもっと成長しているのに、狛犬を動かせるほどの力がないと、無意識に思っていたわけだな」

「なるほど――」

「あと、君は徒然草を知っているかい」

「いやまあちよつとは知っていますけど、作者が兼好法師ということくらいしか――いや、吉田兼好なんでしたっけ」

「ああ、吉田兼好は兼好法師ではないとされているから

兼好法師で合っているよ。まあそれはさておき、『丹波に出雲といふ所あり』という話があつてね。内容は、君が調べてみると良い。今日の出来事と大体同じだから」

「大体同じなんですか。てことはオチを知っていたってことですか」

「うん、まあそうなるね。といっても、本当に徒然草と同じオチかなんて分かつてはいなかったけどね」

桃寧さんが、神妙な顔でこちらを向き、聞いてくる。

「君は、徒然草のネタバレ大丈夫だったか」

「大丈夫に決まつてるでしょう。古典も古典ですよ」

「それは良かった。——と、丁度二百三十六段か」

「なんで階段の段数数えてたんですか。器用ですね。というか、二百三十六段はちょうどじゃないですよ」

「いいや、ちょうどだよ。——さあ、海に浮かぶ鳥居を見に行こうか」

鳥居

僕たちは階段を降り、広い道路までやってきた。夕方へと近づいてきた空は、赤く染まり始めていた。

「この辺の道路は通行量が多いですね。やっぱり観光地ともなると、こんな季節と時間でも人通りはあるもんですね」

「そうだな。活気があるというか、良い町だな」

なんとなく、今日の一日を思い返してみる。

バスを乗り間違えたことから始まり、定食屋でご飯を食べ、水族館に入らず、神社で狛犬を見て、そして今、海に来た。濃縮還元されたジュースのように、実に濃いい一日だった。

僕の隣で、桃寧さんが海の方を眺めている。視線の先には、今日の目的地である鳥居が鎮座している。

「なあ、助手よ。君はこの鳥居を見てどう思ったか聞いてもいいか」

桃寧さんに聞かれたことを、正直に答える。

「思ったよりもなんというか——小さいですね」

「ハハ、そうだな。同感だ。小さいというか、迫力が無いというか、覇気がない」

「上で見た本殿の方が良かったですね。ちよつと鳥居遠いですし」

「まあこういう感想は、生で見た者の特権だからな。私たちが見た景色は、私たちだけのものだから、好き勝手に感想を言っちゃって良いだろう」

「バチは当たるかもしれないけどね」

「言えてるな」

二人ともに口を閉じて静寂が訪れる。風は頬を軽く撫でるように吹き、髪が揺れる。波音がよく聞こえた。しゃがんで触れれば届くほどの距離まで、海に近づいている。今朝目覚めたときには、この光景を思い描けてはいなかっただろう。利那的に生きる桃寧さんの隣では、明日のことも想像できやしない。急に思いつきでこうして海を眺めることも、事件に巻き込まれることも、何も起きずに終わることも、すべてが僕たち次第で、すべてが巡り合わせだ。未来には無限に選択肢が存在して、過去には選り取ってきた一本だけの轍が残っている。たま

たま交差した僕たちの轍からは、お互いの過去を肩越しに眺めることしかできない。だとするのなら、これから進んでいく道が併走していくことだけを願おう。どんな過去であろうとも、今を生きている僕たちは、過去に生かされている。傷だらけでも、憎んでいても、僕の過去は僕だけのもので、変えられない。過去の苦しみが消せるのだとしても、この人と出会えないのなら、僕は過去を変えたくない。

永久には続かないこの幸せを味わうことですら罪になるというのなら、僕が世界を裁こう。この人を否定する人の分だけ、僕が肯定しよう。抱えきれない罪を背負うのであれば、僕もともに背負おう。

僕はこれまでの人生で、幾度となく過ちを犯してきた。たいしたことではない。通り雨にずぶ濡れになったりとか、鼻をかむティッシュが無かったりとか、転んで怪我をして血が出たりとか、そんな些細なことだ。でも僕は、ほんの少しだけ苦しんだ。次の日にはなんてことなかったと思うようなことだけど、この苦しみを次からは感じないようにしようと思った。だから毎日カバンには、折りたたみ傘も、タオルも、ティッシュも、絆創膏

も、モバイルバッテリーも、ヘそくりも、レジ袋も、ハンドクリームも、一回しか使ったことがないようなものすらいくつも入っている。なんでもないときに会った人には、心配性だと笑われたこともある。実際に僕もそうだと思う。こんなにも物を詰め込んだ荷物をいつも持ち歩いているのは、非合理的な生き方だ。でも、これらが必要な人に出会ったときは、感謝をされる。だから持ち歩いているわけではない。僕が自分のために、持ち歩いているのをたまたまあげているだけで、人助けのためではない。それなのに、僕の失敗から来る大荷物は、時折誰かを救ってしまう。過去の失敗が、今、肯定される。

僕は、この人の苦しみをまだ知らない。その気持ちを味わったことがないから、同じ失敗を多分していかないから、どうして良いか分からない。どうかできることなら、ともに苦しませてやくれないうか。失敗まみれの僕の話と引き換えて。苦しい過去でも、今の僕を助けてくれるかもしれないから。僕の過去が、今を生きるあなたの助けになるかもしれないから。華奢な両肩に背負うには重すぎるほどの荷物でも、ともに背負えば少しく

らしい楽になるだろう。だから、いつか話したいと思ってくれた日には、離したいと思ってくれた日には、受け取る覚悟はできている。

「全部口に出していたぞ」

桃寧さんが唐突に口を開く。

「——え、嘘ですよね」

「安心しろ、嘘だ」

「嘘がしようもなさすぎますよ」

「でも、私にも教えてほしいものだな。君がどう思っ、何を感じているのかを」

ああ、僕は桃寧さんのことを知ろうとしていたのに、僕のことを知ってもらおうとしていなかった。僕が知りたいと思うのと同様に、この人も僕のことを知りたいと思ってくれていたんだ。

「そうですね。じゃあ、帰りながらもゆっくり話しましょうか」

今日この瞬間に死んだって良いと思うほど、幸福な日を毎日過ごしている。この日々がまた明日も続いていくことを思えば、明日も生きていいと思えた。もしこの幸せが不幸せへと変わる日が来るのなら、その時はどう

やって死ねばよいのだろうか。いつか訪れる幸福な死まで生きようと、僕は海と鳥居に向けてひそかに宣言した。